OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	精神病院の共用空間に関する建築計画学的研究
Author(s)	飯田, 匡
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏名	飯田（いいだ） 匡（ただす）
博士の専攻分野の名称	博士（工学）
学位記番号	第 18790 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科建築工学専攻
学位論文名	**精神病院の共用空間に関する建築計画学的研究**
論文審査委員	（主査） 教授 柏原 士郎 （副査） 教授 舟橋 國男　教授 吉田 勝行　助教授 横田 隆司

論文内容の要旨

本論文は、近年の精神医療施設において、患者の社会復帰を念頭に置き、入院治療中心から通院治療、地域医療といった方向へと変化しつつある状況を踏まえて、主として病棟や外来等の患者が日常利用する共用空間における利用実態調査を通して、これからの精神医療施設のあり方を探ることを目的としている。

本論文は、7章から構成されており、概要は以下の通りである。

第1章では、研究の背景、意義・目的、および関連する既往の研究と本研究の位置付け等を述べ、本研究の流れを示している。

第2章では、我が国における精神医療施設の規模等について概観するために、データの収集・分析を行っている。そして標榜診療科のタイプから施設を類型化し、それぞれのタイプにおける規模、外来率その他の特性を明らかにしている。

第3章では、病棟での基本的なプログラム等に関するヒアリングや、様々な空間構成を持つ病棟において実施された入院患者行動の 24 時間の実態調査から、病棟ごとの空間構成と患者の行為や滞在空間の関係を分析し、空間構成の違いが患者行動に及ぼす影響を明らかにしている。

第4章では、複数の患者に対して追跡調査を行い、患者の1日の行為や滞在空間に関する特性からクラスター分析を用いて患者の類型化を試みている。さらにヒアリング調査によって得られた入院患者個々の属性と行動特性との関係を分析を通して、精神科病棟の計画に関する提案を行っている。

第5章では、精神科病棟、および一般科外来の喫煙室において、利用者数や滞在時間等の実態を観察調査を通して明らかにしている。さらに、到着間隔分布や滞在時間分布を元に待ち行列理論の適用による規模計画の可能性を検討し、病棟における適正な喫煙室の規模について考察している。

第6章では、精神病院および一般病院の外来待合及び玄関ホール等において、外来患者の行動調査を行い、待ち人数の時刻変動や座席利用の状態等から外来の利用実態を明らかし、外来における患者行動と空間構成との関係から、外来の計画のあり方について考察を行っている。

第7章では、本研究の主たる成果をとりまとめ、今後の課題を明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は設計思想や空間構成の異なる複数の精神科病棟において詳細に調査、比較を行っており、病棟環境と患者行動との関係を抽出・分析している点、及び100名近くにわたる患者についての詳細な追跡調査を通して、患者個別の属性と空間構成との関係がどのように行動特性に現れるかを考察し、空間構成のあり方を探った点は特筆すべきである。

本研究の成果を要約すると次の通りである。

① 病院全体の計画について、外来率や1床あたりの延床面積といった視点から精神病院と総合病院とを比較し、精神病院の建築計画上の特殊性を明らかにしている。また精神病院の類型化を行い、空間構成上の特徴を明らかにしている。

② 精神科病棟において、患者空間のプライバシーを確保することや、患者密度の低減等による病棟環境の変化は、患者の私的領域の確保に寄与し、患者が安定した生活を送るうえで有効な手法であること等を示している。また、病室の高機能化、共用空間の分散配置等により、入院患者が自発的な病室や共用空間の使い分けを行うこと等、環境の変化が患者の行動に影響を及ぼしていることを明らかにしている。

③ 精神科病棟における入院患者の1日の行動および滞在場所の分析から患者の類型化を行っている。その結果、様々な属性を持つ患者をいくつかのタイプに分類している。さらにそれぞれの患者属性と患者行動との関係を分析し、入院生活における拠点としての病室およびデイルームの重要性を指摘している。

④ 性別、年齢、入院期間、面会の頻度、趣味の有無、といった患者の属性と患者行動との関係の分析を通し、精神科病棟の計画に関して、病棟内に様々な活動のための多様な空間を用意すること、患者の高齢化への対応を考慮すること、入院患者が社会との繋がりを感じられるような施設配置の工夫をすること等を提案している。

⑤ 喫煙室において、利用者数や滞在時間等の実態を明らかにし、さらに到着間隔分布や滞在時間分布を基に待ち行列理論を適用することにより、適正座席数の算出が可能であることを示している。

⑥ 精神病院および一般病院の外来待合及びエントランスホール等において、待ち人数の時刻変動や座席利用等、外来の利用実態を明らかしている。外来における患者行動と空間構成との関係から、精神病院の外来計画のあり方について考察を行い、待合の空間構成の工夫により、様々な待ちの空間を用意することが有効であることを指摘している。

以上のように、本論文は精神医療施設における空間構成に関して、患者の多様な属性から生じる様々な患者行動を基に考察、提案が行われており、今後の精神医療施設の共用空間のあり方に有効な示唆を提示している。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。